

春燈

June 2015

6 月号



主宰の句

安立公彦

鳥雲に永久の祈りの招魂社

幼児とひと日の旅や初ざくら

浸蝕の岩肌荒き海市かな

夜も白き波引く渚伊豆暮春

天上に百花の吐息夕ざくら



安住敦の句

枯芙蓉気儘に生きし覚えなし

「柿の木坂雑唱」昭和五十一年

私は先生に直接ご指導を受けた数少ない弟子の一人である。優しくも、近づき難い古武士の風格の師であった。この句自註によると少年時代から貧しく親や兄に気兼ね許りして育ち、思い切って気儘に暮らしてみたかったと今頃になって思うとある。世にも人にも寡黙を持つて抗していらした先生。晩年には、少しは気儘になさる事が出来ただろうか。他人事とも思えぬ我が齡である。

鷹崎 由未子

安住敦の句

啄木忌いくたび職を替へてもや

『古暦』昭和二十三年

啄木忌の句は『古暦』にもう一句『歴日抄』に二句ある。「不遇と貧困の天才詩人に自らを準えたのではない。己の貧しさが啄木を二層身近に感じさせた」と自解。

原句の下五は「替へても貧」。これを万太郎が「替へてもや」と直した。何と精妙な添削であろうか。この最後の「や」を大野林火は「嘆声の凝集」だと称えた。

戦後の貧窮に敦は更に「春燈」経営の辛労を背負った。

片山博介

燈下集

○ 藤原若菜

春泥や己が足跡見る鴉

嘴振つて漱ぐ鴉や春の水

旅先の吾を呼び止むる土ひひな

紫雲英野やゆびわ・かんむり・くびかさり

鳥雲にDNAの羅針盤

○ 大文字孝一

大寺の芽吹き整ふ古木かな

滑空の鳶の自在やうらけし

毎日をしていねいに生きあたたかし

畦道のS字に曲がる日永かな

真作に優る贋作四月馬鹿

○ 和田絢子

桂浜の春の汀に憩へるや (童・北村桂石さん)

図書館に一ト日籠りぬ菜の花忌

雛飾り寧らぎありぬ独り居に

陸奥の近況を聞く春炬燵

酒中花椿咲きて句会に連なりし

○ 篠原幸子

水草生ふ新たな知人多弁なり

カメラ目線の右往左往や吊し雛

本日分売切れました桜餅

面影や作家秘蔵の木彫雛

ひとときは恋かと思ふ春の星



○ 神田 恵琳

高階のみやこ一塊おぼろかな
落花さそふ雨に片身を濡らしをり
一枚の画布の広ごりさくら並木
泉水の点描に散る残り鴨
竹秋や西行堂跡風めぐる

○ 小山 繁子

咲満ちて朝の光の辛夷かな
菜の花の風をこぎ出す三輪車
囀や階段下の秘密基地
黒板の消忘れあり鳥雲に
桃の花母はしづかに老いてゆく

○ 小島 昭夫

春霖や隼人の悲壮田原坂
クレソンの岸辺一列水の春
啓蟄や園児せつせと土を掘る
春の水掬ひ胃葉飲みにけり
とんとんと叩くなめろう安房弥生

○ 中嶋 昌子

歩を止めて樹々の芽立ちの声聞かな
足萎えの身に草萌えの青さかな
亡夫の忌や白木蓮の空仰ぎ見る
あたたかや花舗に花選る女達
白雲を何にたとへむ春深し

○ 渡辺 若菜

桜貝の思ひ出残し嫁ぎけり
墓誌銘に母の名刻む桜かな
ミモザ咲く駅から見ゆる時計台
輝いて消ゆる飛行機春の雲
お白酒たつぷりつがれ子を持たず

○ 西岡 啓子

雁ゆくや引き潮の川ゆるやかに
啓蟄や雲の流るるにはたづみ
春風や小枝啜へてとぶ鴉
吊革の揃ひてゆるる春の昼
母訪うて帰り道なるげんげ路

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

朝戸繰れば青き光や初燕

花影の無情の中へ身を委ね

なにもかも身をはなれゆく夕桜

老いらくの夢の名残や京椿

杖先のやはらかに春落葉かな

○ 赤岡茂子

白木蓮を天蓋となす無縁仏

居眠りの出さうな土手のつくしんぼ

花菜漬旨し思ひ出ほろ苦し

ビタミンカラーのサラダ春眠揺り起こす

居て煩瑣留守物足らぬ春休

○ 後藤眞由美

曲水や雅へ誘ふ琴の音

衣ずれのささめく闇や吊し雛

二丁櫓の若布をゆらす渡しかな (鴨川三句)

真砂女忌や波間にあそぶ生簀籠

「白鷹」にしのお真砂女や春の宴

○ 吉村さよ子

竹林へ流るる煙春の夕

笑もたらし後は雨音春の夢

鳥雲に老いて無料の美術館

一礼もてくぐる山門花櫛

未来図へ園のさくらの咲きはじむ

○ 上野進

三椏の花とおぼしき白かげり

関宿に江戸の春風高札場

天保の雛見てゐる静心

樹のいのち鳥のいのちと囁れり

片栗の花のささやき雑木山

春燈の句

安立 公彦選

雪洞やそぞろ歩きの花衣

東京 大森 道生

天気褒め弁当褒めて花見かな

春雨や傘傾げ合ふ先斗町

行く春や母の月日の古ミシン

木遣歌匠の門の梅真白

埼玉 茂木 なつ

道の辺に見えぬて遠き杏花村

高遠の花の陰なる悲話ひとつ

菜の花や馳する駿馬の蹄あと

一日を編みては解く春セーター

婚近き子のあさつきを刻む音

若者と春の足湯に隣合ふ

たんぽぽや方便に合はず袴丈

春光や箔なす川の鱗波

庭下駄の音に色めく春の鯉

東京 大西由美子



口ボツトの色なき声や春うれひ

両岸の千住論争亀鳴けり (奥の細道出発点)

つくしんぼ子育てといふ至福かな

女には通す意地あり紅椿

落ちてなほ風に震へる白椿

落椿彩に微かな遅速あり

福祉の手借りてしあはせすみれ草

芽吹山つむり大きな童子仏

落椿双手に悼み心かな

蝌蚪の紐のぞいてをりし幼き日

八十畳の国旗はためく建国日 (出雲天社)

落味噌のさ緑匂ふ志野小鉢

野遊や柳の枝の菜の箸

草むらに湧く鳴き声や夕雲雀

神奈川 溝越 教子

埼玉 滝澤 千枝

島根 土江 比露

余言

安立公彦

春光の果てのひかりや鳥の影 (故) 西谷 良樹

西谷良樹さんが逝かれた。四月十日、七十六歳だった。六月号の投句は四日に着いている。作品の筆跡がやわらかいのは、或いは夫人の代筆かも知れないが、一句に弛みはない。物ごとのけじめを守るひとだった。

十四日の通夜には、その徳を慕って、大勢の会葬の方々が見えた。棺のご遺体は瘦せてはいたが、いいお顔だった。棺に手を合わせ、御霊やすかれと、浄土への安心を祈り上げた。この句、良樹さんは「春光の果てのひかり」を、今生の際に見とどけられたのである。う。いい句だ。

四月なほ雪ふる町に生きて卒寿 滝沢 幸助

この「雪ふる町」は、会津若松市。東北を望むと磐梯山が聳え、その奥に、高村光太郎に詠われた「智恵子抄」の

安達太良山がある。磐梯山の南麓には猪苗代湖が浮かび、下って南東には、陸奥の入り口、白河関跡が残る。会津若松城も近い。しかし冬場の寒さは厳しいと聞く。作者はその史実に包まれた会津若松市を故郷とされる。

卒寿と聞くと故なくめでたい思いがする。この句はそのめでたさに、「生きて」が付く。「生きて卒寿」の中には余人には知り得ない厳しさもある。作者は今その卒寿の身をしみじみと振り返る。その思いはまた今後への羽撃きともなるのである。そうあってほしいと願う。

春深し雲の話を水が聞き 近藤 牧男

一読生新な気に溢れる句である。「雲の話を水が聞き」には童話的発想がある。しばらくそのページをめくろう。場所は里山。程よい幅の川が流れ、水面には雲影が浮かぶ。川の両側には耕された春田が広がる。田植も近い。夕方農夫が帰ると、一帯は山川草木自然の姿に戻る。流れる雲は下界の日常を水に語る。水面には流れがあるが、その水を支える川は一定である。川は定住の中に移りゆく四季の姿を雲に話す。やがて一帯は星空となり、雲も川も休息に入る。限りなく愉しい想像を呼ぶ句である。

年波に乗りて自在や半仙戯 卜部 黎子

「半仙戯」はぶらんこ、「鞦韆」とも言う。ぶらんこが春の季語となつたのは、北宋の詩人蘇軾の詩、「春夜」に「春宵一刻值千金（略）鞦韆院落夜沈沈」と詠まれていることに由来すると一書にある。同書はまた、鞦韆は春の初めの女性の遊びであつたとも記す。

「年波に乗りて自在や」は、如何にも練達な詠みだ。年波がいい。老いてでは句にならない。中七の「自在や」が「年波」を受けて、「半仙戯」を呼び込んでゐる。

天水の島のたつきや春の鶯

栗原 完爾

この「島」は、安房鴨川を望む仁右衛門島。三月十五十六の両日、真砂女追善大会での作。島には平野仁右衛門一家のみ住む、個人の所有する島である。用水も天水を使うという。この島の平野家の東門脇の崖に、へあるときは船より高き卯浪かな 真砂女◇の句碑があり、洋上はるか真砂女の実家、鴨川グランドホテルを望む。

この句、その句碑にはふれず、「天水の島のたつき」に焦点を当てたのがいい。再訪したい島である。

毎日をしていねいに生きあたたかし

大文字孝一

「毎日をしていねいに生き」がいい。漢字では「真摯」に近いが、もっと木訥な感じが漂ってくる。この語句を見て

いると、何故か武者小路実篤の小説が思い出されてくる。作者も実篤の愛読者か。「あたたかし」の季語もいい。無造作な配列のようだが、よく意に適っている。

作者は東京青山に「うつわ」の店「大文字」を開店している。今年の二月、講談社から、『ていねいに暮らしたい人の、「二生使える」器選び』という文庫本を出版した。その自序に、「器はあくまで脇役ですが、良品脇役あつてこそ、主役の料理が映えるのです」と記す。名言である。これは俳句についても言えること。季語を選ぶ際も、ていねいさを大切に考えるべきである。

光る風まつて妻は逝きにけり

藤丸 誠旨

作者は春先から中縦隔胸腺腫という病で入院、三月その病因の切除という大手術を受けた。それは入院先の信州大学でもめつたにない十時間を越す大手術だった。その入院中、前から体調をくずしていた夫人が亡くなられた。作者の手術の三日あとである。夫人の病気については、松本での勉強会の際も聞いていた。

そういう残酷な背景の中で、しかしこの句は夫人への最上の追善となつた。眩いばかりの陽春のひかりをまつて逝く妻を、病林に見送る作者。作者の視線は、涅槃に向かう夫人をあたたく見守っているのだ。タイムラグの有無は問わない。夫婦愛という言葉を変えて思う句である。